

言語活動のさらなる充実を目指した授業づくりの工夫

—児童生徒が主体的に学習に取り組むことができる指導過程の工夫を通して—

外国語科研究会議

研究員 天田 梨那（川崎市立土橋小学校） 知念 清志スチュワート（川崎市立真福寺小学校）

阿部 信也（川崎市立宮崎中学校） 吉田 聖（川崎市立川崎高等学校附属中学校）

指導主事 大窪 洋次郎 齋藤 宗則

I 主題設定の理由

学習指導要領では小学校外国語活動から高等学校の外国語科まで言語活動を通してコミュニケーションを図る資質・能力を育成するということが示されている。平成29年6月に出された文部科学省の小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックでは、言語活動は「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」と述べられている。さらに令和元年度の川崎市総合教育センターの外国語科研究会議においては言語活動を「目的・場面・状況に応じて、生徒自身が、使用する英語や内容を思考、判断し、お互いの考えや気持ちを伝え合う活動」と定義して言語活動を通じた授業改善について研究が行われるなど、言語活動に関しては様々な研究が行われてきた。

令和元年度の川崎市総合教育センター外国語科研究会議においては、「自分自身で使用する英語を思考・判断・表現する言語活動の実施方法についてのさらなる研究の必要がある」¹ということ、また昨年度の研究会議においては言語活動について「言語材料をどのようにスパイラルに扱ったらよいか、場面や題材をどのように設定していくかなど具体的な進め方について研究を進めていく必要がある」²ということが課題として挙げられ、言語活動に関する研究を継続していくことが必要であると考えた。また現行の中学校学習指導要領解説外国語編には改訂の趣旨の1つとして「生徒の英語力の面では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある」³とあると示されている。また研究員からは教材研究の中で児童生徒がコミュニケーションを行う必然性を感じられる目的・場面・状況設定に悩みを抱えていることが課題として挙げられ、山田（2022）は「いつも実際に起きる目的・場面・状況を設定することは容易ではありません」⁴と述べている。その課題を解決するために、コミュニケーションを行う必然性を児童生徒が感じられるような目的・場面・状況がある言語活動の設定と、そのような言語活動を繰り返し行いながら目標の達成に向かう指導過程の工夫など、児童生徒が主体的に学習に取り組むことができる言語活動が充実した授業づくりが欠かせないと考え、本主題を設定した。

II 研究の内容

1 外国語教育における実態調査と現状分析

小中学校の教員を対象に、それぞれの校種の外国語教育における言語活動に関する意識を把握するために、意識調査（表1）を行い、小学校教員91人、中学校教員50人の教員から回答を得た。

1と2の質問から、学習指導要領で求められている言語活動における目的・場面・状況を設定することの必要性は理解しているが、その設定に関して学校現場では困難さを感じていることが分かる。

¹ 令和元年度川崎市総合教育センター研究紀要 第33号2019年 p.157

² 令和3年度川崎市総合教育センター研究紀要 第35号2022年 p.174

³ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』p.6

⁴ 山田誠志 『全国の実践から学ぶ 中学校英語教育 35のポイント』2022年 日本標準 p.45

このような状況から、普段の授業において児童生徒がコミュニケーションを図る必然性を感じることができる言語活動が十分に実施されていないのではないかと考え、この課題に対する支援の手立てを今回の研究の1つの視点とした。

3から5の質問では、言語活動を繰り返し行う中での振り返り活動とその後の指導計画について質問をした。質問3～4では言語活動後に振り返り活動で自己の課題を記述させる活動などは広く実践されていることが分かる。しかし質問5で「とても当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した割合が小学校では60%、中学校では62.8%となっており、児童生徒が振り返り活動で見いだした課題に応じて学習改善するための機会の設定が計画的にできていないことが明らかになった。

表1 外国語教育における言語活動に関する意識調査

質問項目	とても当てはまる	まあ当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
1 言語活動を行う際には、目的・場面・状況を設定している。	小26.4% 中18.6%	小59.3% 中72.1%	小14.3% 中9.3%	小0.0% 中0.0%
2 言語活動を行う際に、目的・場面・状況を設定することは難しいと感じる。	小17.6% 中20.9%	小50.5% 中51.2%	小31.9% 中23.3%	小0.0% 中4.7%
3 活動の中で中間指導を行って、児童生徒がゴールとなる姿を意識して、学習に関する自己調整を行うことができるよう心掛けている。	小12.1% 中18.6%	小63.7% 中65.1%	小18.7% 中16.3%	小5.5% 中0.0%
4 言語活動を行った後は児童生徒が振り返りを記述する活動を行っている。	小56.0% 中25.6%	小30.8% 中46.5%	小8.8% 中23.3%	小4.4% 中4.7%
5 児童生徒が振り返りで記述したことを生かし、学習改善できるような機会を設定している。	小13.3% 中4.7%	小46.7% 中58.1%	小37.8% 中32.6%	小2.2% 中4.7%

2 研究の方法

意識調査により実態を明らかにした上で、研究主題に基づき、次の4つの手立てを行った。

(1) 手立て① 言語活動における目的・場面・状況設定の工夫

児童生徒にとって身近で、自分の考えや思いを伝え合う必然性を感じられる目的・場面・状況の設定をすることで、自分自身の言葉で主体的に表現する姿を目指した。そのために教科書の題材を微調整し、その単元の学習内容と関連づけた目的・場面・状況の設定になるように工夫した。

(2) 手立て② 単元計画における小さな言語活動の繰り返しの設定の工夫

単元終末の言語活動につながるように、それに類似した小さな言語活動を繰り返し行う授業計画を作成した。指導してから言語活動に取り組みせるのではなく、活動に取り組みせながら少しずつ目標に到達できるようになる過程を意識した。

(3) 手立て③ ねらいにせまる中間指導の工夫

教師によるデモンストレーションなどでコミュニケーションを行う目的・場面・状況の設定を理解した後に、活動の前に指導をしすぎないことを意識し、子どもたちに活動に取り組みせながら改善点に気付かせたり、誤りを訂正したりする指導過程を重視した。

(4) 手立て④ 振り返りを生かした言語活動の計画の工夫

児童生徒が自分の課題を認識し、次への見通しをもつことができるように振り返り活動を生かすことを意識して授業づくりを行った。広く行われている言語活動後の振り返りを行うことに加えて、類似した単元終末の言語活動を年間を通して複数回計画し、自己調整を図りながら年間を通してより主体的に学習に取り組むことができるように工夫した。

(5) 手立て⑤ 先行研究で作成された川崎市版 CAN-DO リストスタンダードの改訂

意識調査により明らかになった言語活動における目的・場面・状況の設定に対する困難さを解消するために、昨年度作成された川崎市版 CAN-DO リストの各項目に当てはまる目的・場面・状況設定のある言語活動例を追記して、今年度版の川崎市版 CAN-DO リストスタンダードを作成した。

3 研究の実際

(1) 主に言語活動における目的・場面・状況の設定の工夫を意識した事例 A 小学校 4 年

単元：Let's Try!2 Unit 8 This is my favorite place.

ゴールの言語活動：保護者に学校のお気に入りの場所を紹介するためにオリジナルスクールマップを使って道案内をしよう

表2 単元における主な言語活動の流れ

時	言語活動
1	言語活動Ⅰ ALT に指導者が校内の案内をしたりお気に入りの場所を紹介したりする場面の語彙や表現を聞く。
3	言語活動Ⅱ ペアになり自分のお気に入りの場所(動画または画像)へ案内する。
4	言語活動Ⅲ ALT を自分のお気に入りの場所(動画または画像)へ案内する。(本時)
後日	保護者に学校生活のことをもっと知ってもらうために、オリジナルスクールマップを見せながらお気に入りの場所へ道案内して、その場所について伝える。

言語活動の目的・場面・状況として、保護者に学校のお気に入りの場所を紹介するためにオリジナルスクールマップを使って道案内をしようという設定をした。具体的には普段の小学校生活を知らない保護者に

「自分の学校のお気に入りの場所を紹介する」という設定で活動し、その成果としては教科書に載っていない中庭や学年花壇、ウサギ小屋などの場所を紹介する児童もいたり、紹介する場所やその場所がお気に入りの理由などについても、児童一人一人が内容を考え、自分の言葉で表現しようとしたりする意欲的な姿が見られた。また、活動後の振り返り活動では「友達のいろんな意見が聞けて楽しかった」という発話があった。保護者へのプレゼンテーション後には「少し緊張したけれど、お母さんが喜んでくれてよかったです」という感想もあり、児童の実態に即した目的・場面・状況の設定をすることで、児童一人一人が適切な内容を考え、主体的に表現する活動にすることができた。

(2) 主に単元計画における小さな言語活動の繰り返しを工夫した事例 B 小学校 5 年

単元：NEW HORIZON Elementary Unit 7 Welcome to Japan

ゴールの言語活動：ALT の家族と親戚に日本の四季や文化について伝えよう

表3 単元における主な言語活動の流れ

時	言語活動
1	小さな言語活動 (1 minute Talk) 1 What season do you like?
2	小さな言語活動 (1 minute Talk) 2 What do you do on New Year's Day?
3	小さな言語活動 (1 minute Talk) 3 What do you do in Summer ?
4	小さな言語活動 (1 minute Talk) 4 季節の行事の 3 Hint quiz
5	小さな言語活動 (1 minute Talk) 5 What do you do on (行事) ? (本時)
6	大きな言語活動 ALT とのチャレンジタイム (パフォーマンステスト)

ゴールの言語活動に、児童が一人ずつスライドを見せながら自分の好きな季節とその季節に楽しむことができる行事や食べ物、遊びなどの日本の四季や文化についてALTの家族と親戚に伝えようという目的・場

面・状況を設定した。

その目標達成につなげるために、小さな言語活動の繰り返しを意識し、毎時間の授業の冒頭で既習の表現やその時間に学ぶ表現を用いて 1 分間会話をする活動を行った。毎時間のトピックがゴールの言語活動につながる話題となっており、児童は対話的に自分の考えを表現したり、他者の考えを聞いて参考にしたりしながら表現を広げたり深めたりしている姿が見られた。

小さな言語活動に取り組む際には中間指導・振り返り活動を充実させることも意識をした。中間指導の工夫の一つとして、日本の行事や食べ物を紹介した後に会話を膨らませるためにはどうしたらよいかを考えさせる時間を取った。その際には教師によるデモンストレーションを再度見たり、目標達成に近づいている児童の良いアイデアを共有したりするなどの中間指導を通して児童が改善点に気付くように工夫した。中間指導は内容面（表現内容の適切さ）と言語面（英語使用の正確

さ)について行い、1回の中間指導で指導しすぎないように長期的な視点で繰り返し指導していくことを心がけた。また、振り返り活動の充実を図る工夫として、Google フォームで取った前時の振り返り活動の記述を授業開始時に学級全体で共有し、児童が課題を確認して学習に取り組む意識付けを行った。

(3) 主にねらいにせまる中間指導の工夫を意識した事例 C 中学校2年

単元：Here We Go! English Course 2 Unit4 Tour in New York City

ゴールの言語活動：海外からの旅行者に、旅行プランナーとして旅行プランを考える

表4 単元における主な言語活動の流れ

時	言語活動
1	言語活動1 先生やALTにおすすめの夏休みの過ごし方をペアで提案する(本時)
3	言語活動2 学年の先生の好みに合わせて旅行プランをペアで考える
5	言語活動3 学年の先生の好みに合わせて旅行プランを班で発表する
8	言語活動4 ALTに質問をして興味・関心を探り、おすすめの観光プランを考える。
9	言語活動5 ALTの興味・関心に合わせておすすめの観光プランを発表する。
後日	・旅行プランナーとして、日本旅行を考えている海外の人におすすめの旅行プランを紹介する。

ゴールの言語活動には、日本に来る海外からの旅行者に合った旅行プランを提案するという目的・場面・状況を設定した。

単元のゴールに類

似した小さな言語活動を繰り返し行った。検証授業は第1時で実施し、目的・場面・状況を「今年の夏はあまり楽しめなかった先生に、来年のおすすめの過ごし方を提案しよう」と設定した。ALTと教師による夏休みについての話を聞き、先生達の好きなことや興味に合った提案アイデアを伝え合っ て考えを広げた後に、実際に先生に提案する活動を行った。その場所の魅力やその場所でできること、その場所にあるものを表現したいがどのように表現したらよいか分からない生徒がいることを想定してペアを変えながら活動を行った。そのような生徒の発言に注目して机間指導を行い、活動の中でのねらいにせまる効果的な中間指導を行うよう心掛けた。机間指導で見取った多くの生徒に共通する間違いや、「言いたいけれど英語で言えなかった表現」などの疑問等を全体で共有し、改善策を考え、その後ペアを変えながら活動を繰り返した。このような中間指導の段階を踏んでいくことで少しずつ表現できることが増え、自信をもって取り組む生徒が増えた。

また、過去に行ったスピーキングテストの振り返り活動の記述などを授業内で適宜確認させることで、ゴールの活動に向けて、以前できなかったことを改善しようと授業の中で教師に積極的に質問する生徒が多くなった。ゴールの活動後の生徒の振り返りを見ると、「間違えてもいいので自分の考えが伝わるほうを大切にして授業に取り組んだ」や「Unit3までの反省を活かし、事前に友達や先生に分からないところを聞いて、発表のときにも授業で確認したポイントを意識して取り組むことができた」などと答えている生徒もおり、中間指導を意図的に行うことでねらいに対する生徒の意識を高めることができた。

表5 第1時と後日パフォーマンステストを行った際の発言内容の比較

第1時	後日パフォーマンステスト時
You should go to Chiba. It has Disney Land. If you like exciting attractions, you can enjoy roller coasters. You can see Mickey Mouse there. You can take pictures.	I'll tell you a sightseeing plan. If you go with your family, you should go to Chiba. There are some amusement parks. For example, Tokyo Disney Land and Disney Sea. My recommendation is Tokyo Disney Land. It is very popular in Japan. There are a lot of things to do there. First, you can enjoy taking roller coasters. It's a little scary but it's fun. Second, you can take pictures with Disney Characters. I think your child will be happy. If you visit there, you will have a wonderful time.

(4) 主に振り返りを生かした言語活動の計画の工夫を意識した事例 D 中学校 3 年

単元：Here We Go! English Course 3 Unit 2 Our School Trip

ゴールの言語活動：修学旅行で訪れた長崎を紹介したり、外国人講師のおすすめの場所（日本国内外）について聞いたりしよう

表6 オンラインでのALTと1対1で会話する活動

回	月	言語活動
1	5	世界の学校生活について紹介したり、聞いたりしよう
2	7	おすすめの観光について紹介したり、聞いたりしよう
3	12	世界のクリスマスの過ごし方について話そう
4	12	世界の新年の過ごし方について話そう
5	2	世界の卒業式について話そう

ゴールの言語活動の目標の達成のために、本単元の学習過程においては、類似の話題での言語活動に繰り返し取り組んだ。対話を繰り返しながら、自分の考えを広げたり深

めたりする働きかけを行った。第7時に行ったALTとの1対1の会話活動は今年度2回目の活動であった。またALTと1対1の会話をする活動を年間で5回計画し、それぞれの活動の振り返りを生かし、長期的に資質・能力の育成を目指す指導計画を意識した（表6）。第8時に第7時の活動の中で出た「言いたかったが、うまく伝えられなかった」表現などを振り返り、個人や学級全体で確認し、会話する活動を第8時で行い学習改善を促した。そして12月に設定されている次のALTとオンラインで会話をする機会へ向けて単元を越えて自己調整を図りながら、学習に取り組むことができるような工夫を行った。オンラインでの会話は限られた回数しかで実施できないが、それぞれのオンラインで会話する活動を行った際の振り返りをスプレッドシートに記録し、通常の授業内で行う会話する活動の時に適宜自分で確認できるようにした。そうすることで、「学習した後に自分の振り返りを生かすチャンスがある」という検証前（7月）と検証後（12月）に行った生徒アンケートの結果は7月が39.9%であったが12月には77.5%となり、振り返りの確認と次の機会があることを自覚させることで自分の課題の克服のために日々の活動での自己調整を促すことができたと考える。

(5) CAN-DO リストスタンダード改訂版の作成

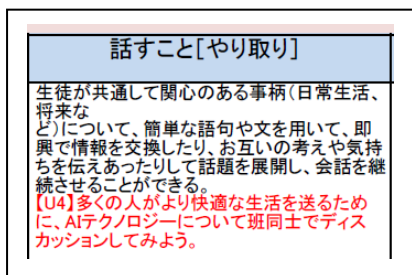


図1 今年度版のCAN-DO リストスタンダード (中学校版一部抜粋)

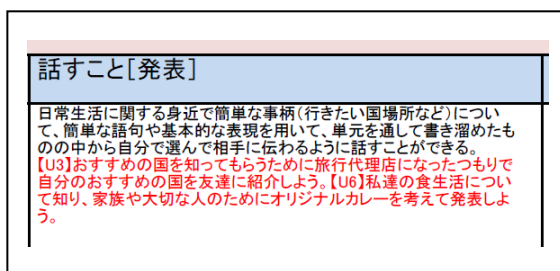


図2 今年度版のCAN-DO リストスタンダード (小学校版一部抜粋)

昨年度の研究会議で作成された川崎市版CAN-DO リストスタンダードの各項目に目的・場面・状況の設定がある具体的な言語活動例を追加した今年度版のCAN-DO リストスタンダードを作成した。教科書に掲載されている活動には目的・場面・状況の設定がされていなかったり、児童生徒の実態に合わなかったりすることもある。そこでそれぞれの教科書の題材を生かしながら、「何のために」「誰に対して」などより具体的な視点を加えた言語活動例を提案した。このリストを活用することで各学校において児童生徒の実態に合わせた目的・場面・状況の設定が充実した言語活動の実践が広まっていくと考えている。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

検証授業では4つの手立てのすべてを意識して授業を行ったことにより、次のような児童生徒が主体的に学習に取り組む姿につながった。

(1) コミュニケーションを楽しみながら学ぶ姿が見られた

検証授業の事前と事後に行ったアンケートの「英語で自分の考えを自由に伝えたり、相手の考えを聞いたりする活動は楽しい」という項目に「はい」と回答する生徒がD中学校では事前の63.8%から84.3%に増加するなど、全4校で上昇が見られ、児童生徒の実態に合った目的・場面・状況の設定をすることで、より学んだり表現したりする楽しさを感じることができ、主体的に学習に取り組むことができると考える。

(2) 試行錯誤しながら学びを調整する姿が見られた

小さな言語活動を繰り返し行う中で、教師が児童生徒の表現内容をまず受け止め、目的・場面・状況にふさわしい表現になっているかを教師のモデルを改めて示したり、ねらいにせまることができているほかの児童生徒の表現を共有したり、何を伝えるとより良くなるかを考えさせたりする中間指導を行った。そのような中間指導を受けて児童生徒は自分の表現内容を振り返り、修正することを繰り返して少しずつ自信をもってゴールに向かう姿が見られた。一つの単元だけでなく、D中学校の実践のように年間を通して振り返りを生かす類似の言語活動を設定することで、長期的にも見通しを持って授業に取り組むことができると考える。指導を十分に行ってから言語活動に取り組みせる積み上げ式の指導過程ではなく、ゴールを明確にした上で、「間違ってもよい」という雰囲気の中でまず言語活動に取り組みせることと中間指導、振り返りをねらいに向けて繰り返し行うことで、児童生徒の主体性を引き出すことができた。

2 今後の課題

今回行った4つの手立ては児童生徒の主体的に学習に取り組む姿につながるが、その手立てを行う十分な時間を確保することが難しいと感じた。目標となる姿が共有されていれば自分の振り返り記述等をもとにして、目標に向かって自己調整を促すことができるが、限られた時間の中でどう効率的に言語活動の繰り返し、中間指導、振り返り活動を行っていくかが課題である。年間での5領域の育成のバランスを考えていくこと、CAN-DO リストを年間指導計画と関連付けて活用していくことなどが一つの解決策となりうると考える。

今回は「話すこと [やりとり] [発表]」に焦点を当てた研究となった。聞くこと、読むことについての言語活動の充実を図る手立ての具体については迫ることができなかった。「聞くこと」「読むこと」の資質・能力を育成するための言語活動とその際の目的・場面・状況の設定や、小さな言語活動の繰り返し、中間指導、振り返りをどのように行っていくのが今後の課題であると考えられる。

最後に、本研究を進めるにあたり、適切な助言をいただいた先生方、研究を支援いただいた研究員所属の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

山田誠志『全国の実践から学ぶ 中学校英語教育 35 のポイント』日本標準 2022 年
文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』2017 年